

HO'OPONO

A Night Rainbow Book

著者：パリ ジェーリー&ジョン ココ ウィリス

Copyright 1999

ISBN No.9628020-0-7

初版 1999

Night Rainbow Publishing

Honolulu, Hawaii 96816

翻訳：カミムラ マリコ

目次

ごあいさつ	4
奉献	5
はじめに	6
序文	9
時の前の時	10
マナ	15
‘オハナ	19

カフナ	24
‘アウマクア	28
ポノ	32
フナ	33
‘イムア	38
付録	41
参考文献	
著者について	



感謝の意

クリスティーナ テイラーは、私の目となりマージンを正してくれました。
彼女の助けなくして、この本の誕生はあり得ません。
ジェニー ルーマンは、本全体のカパのデザインの製作を手がけてくれました。
ロレッタ グラボウスキーとジョネット チュンの助手
にも感謝を贈ります。

Mahalo nui loa
大変感謝しています

この本はアロハのエッセンスであったココに捧げます

写真

ジョン カウアコウラ クハイモアナ マイマナ カペラ ウィリス

と

私たちの子供たちに捧げます。

ジョッシュ、ジャスミン、ケハウ、ダニー、マイク、マシュー、ジャスティン、サラ、ハンナ、セス、エマ、アナ、ミンディー、ウェンディー、レイナルド、メリッサ、クリスティン、レベッカ、ジェームス



はじめに

この50年の間にハワイの歴史は、すっかり変わってしまいました。西洋人が思い描いた世界になってしまったのです。この50年間でハワイとその伝統や信仰、生活について、直接ハワイアンから聞いたり体験したものではない、あるいは偽りの情報を元に西洋人が書いた本が多く出版されました。

もしも50年前に、ハワイアンに、ポノ、フナ、‘アウマクアなどの意味を聞いたなら、今知られている意味とは全く違うものであったでしょう。

今日、多くの外国人が自分たちの方が地元の人よりもハワイの文化や歴史の事を知っていると思っています。残念ながら、それは事実であるとも言えます。ここで言っているのは、ハワイに来て学んでいる生徒たちやリサーチをしている方の事ではなく、西洋人が書いた本だけを読んで、ハワイに来て知ったかぶりをしている人たちの事を言っています。私たちには何も聞かず、ただ知っている事を事実であるかのように私たちに話してきます。彼らは、私たちの先祖が何を信じたか、何を食べたか、どのように生活していたかを知っていると思っています。ハワイアンの若者のほとんどは、(特殊な家族の中で育ち家族の歴史や系譜を学んでいない場合) ハワイの過去をあまりよく知りませんので、外国人が真実を知っているわけがありません。

最近、地元の人と何人かでアロハ雑学ゲームというのをやってみました。二人はすべての答えを知っていましたが、他の人たちは、全く答えられませんでした。答えられた二人の内、一人は70歳代のおじいさんで彼の年齢なら昔の事を聞いた事があったのでしょう。もう一人は、小学校4年生の男の子でした。彼の学校には、クプナ（ハワイアンの長老）が教えるプログラムがあったのです。そのクプナたちは、彼に正しい知識を教えていたようです。他の大人たち（12名くらい）は、一人は学校の先生でしたが、全く何も答えられませんでした。外国人たちが、この島々に来て知ったかぶりをするのも仕方ありません。全く恥じるべき事実です。若いハワイアンもが本屋に並ぶハワイの先祖に関する本に書いてある事を信じてしまうのも仕方ありません。

この本は、私の地元の家族、すべてのハワイアン、ハワイアンでない人たちに本当の意味を教える事と、昔のハワイで言葉がどのような意味を持ち、使われたかを教育する目的で書きました。さらにハワイの習慣、伝統ではないものについても指摘していきたいと思います。

一般の学校において、ハワイ語を教えるようになった今、学校の先生たちにも正しいハワイの歴史を教えてほしいと願います。小学校のクプナ・プログラムがあるのは大変良い事ですが、本当の長老たちは他界し、若い親たちが穴埋めをして、ハワイ語、フラ、音楽、工芸等を教えていますが、本当の歴史を知らずに教えている先生が多いので、この本を参考にしてもらえれば幸いです。

私と夫ココは、70年代に生存している長老たちからできるだけ情報を集めていました。モロカイ島のカイリ'オヘ カメ'エクアから学んだ人たちを探していました。ハワイ島に数名が住み移っており、オ'アフ島にも数名、そして残りはモロカイ'イ島に住んでいました。私たちは、彼らを何度も訪ね、カイリ'オヘを知る彼らが幼い頃、モ'オプナ（孫）であった時に口語で伝えられた歴史をできるだけ話してもらうようお願いしました。

一人特別な女性がいました。彼女は、宣教師たちが行なっている事についてとても素晴らしい事だと思っていましたが、ハワイの人々とその歴史に関する事で彼らが話す内容について不満を持っていました。その為彼女は、教会での授業が終わって帰ってきた子供たちを家でまた別にハワイの真実を教えていました。ココの祖母、カウアイ パイアは、カイリ'オヘの娘だったので、彼自身は、この事を知っていましたが、その内容を裏付ける為に他の人たちからの証言を探していました。人々が何を覚えているのか確かめたかったのです。カイリ'オヘは、君主（王室）政治があった時代から、暫定政府～米国の領土となった時代すべてを経験した人でした。その女性は一つの目的を持っていました。カイリ'オヘの系譜と歴史を書き記し、忘れられないようにする事でした。私たちは、彼女の夢を満たす為にも「夜の虹の物語」を書いたのです。

それぞれの章が特定の言葉についての説明だった為、この本の中に収まらなかった情報も多々あります。収集する為の苦労はさておいて、おばあちゃんが語る物語として書きました。この小さな本に必要な内容をまとめました。（フナに関しては、例外で1940年代から出現した言葉です。）

この著名な女性の発した言葉にできるだけ忠実に書き留めたつもりです。彼女とココが、私が仕上げたこの仕事に対して適切なものであると感じていてくれば、うれしく思います。



序文

1994年にココと私がこの本をまとめ始めた時、この本のタイトルは、「ハワイアの道から見た景観」でした。しかし、彼がこの世を去った後、適切なタイトルを見つける事ができませんでした。これを出版させる事さえ疑問に思えてきました。私は彼のように育ってきていませんでした。彼は、ずっと昔の伝統のまま生きてきた人で、思考する事は二番目の手段だったのです。内容の多くは彼から教わったものでした。数年間、手つかずの状態でした。そして、ある時テレビでジョン レイクが「ポノ」について語っているのを見て、まるで稲妻に打たれたように起き上がり、「Yes」と叫びました。タイトルを何にするかひらめき、本を仕上げる事ができるという自信が湧いてきたのです。本は、「Ho'opono (ホ'オポノ)」というタイトルにする事に決めました。「事を正す」、「バランスを取り戻す」という意味です。これはココの意志を継ぐものだと感じました — ハワイのものとハワイのものではないものをはっきりさせる事です。私たちのものであるハワイの真実に誇りを持つ事です。

モロカイ島と他の島々、例えばハワイ島の間には、言葉のニュアンスが多少異なる場合もありました。ただ、その違いは本当に微々たるもので、そんなに問題視するものではありません。それぞれの島々で表現は多少異なっていました。同じ島の中でも、コミュニティーごとに多少の表現の違いというものがありました。でも、大概の内容は同じでした。アクア ハ'オレ (キリスト教の神) が到来し、主たる

神、あるいはハワイ ネイ（ハワイの事）の唯一の神となるまでは、少なくともそう
でした。



時の前の時

霧の中から光が現れた
光は熱く燃えた
霧が立ち昇り、下に青い海を産んだ
霧から、大地が現れた
海が母なる大地を取り囲んだ
海にはたくさんの魚が現れ
雨を集めたたくさんの雲で
空は重くなっていった
色とりどりのアーチが現れ
空と大地をつなげた
このようにして我々の土地は生まれた

大地は揺れ震えた
山々が深い海から立ち昇った
雲から鳥たちが現れ
急上昇しながら山々の頂上を飛んでいく
人が海からやって来た



2000年程前、カヌーの小隊が一つの星を追って太平洋を旅していました。その星は、彼らのある諸島に導きました。小さな港に入り、良さそうな場所だと判断しました。川が流れ、魚もたくさんいて、肥沃な土地があり、谷には滝が流れるとても美しい所でした。そうして、旅人たちはここに定着する事にしました。

彼らが定住するまで、この小さな島は広大な海原の中の無人島でした。彼らと同じように、放浪する船人たちが停泊し、水の補給をして行きましたが定着する事はなかったのです。

彼らは今まで数千年もの間、海人でした。それが今大きく変わろうとしています。土地の上に家を構えようとしているのです。これ以降、彼らは航海をしては、再びこの土地に戻ってくるようになりました。

彼らが最初に定住した土地は、現在モロカイ島のハラヴァ溪谷と呼ばれています。この場所のこの貴重な歴史を知る人は少ないです。海人だった人たちが、土地に住み着き新しい部族、カナカ マオリが誕生したのです。

ハラヴァの頂上には、ハワイ諸島の中で最も古いヘイアウ（聖地）があります。マナ ヘイアウという名がついています。そこからは海を見下ろす事ができます。人が実際にそのヘイアウに住んでいたのか、神に祈りやお供え物をするだけの場所だったのかどうかは、定かではありません。高い場所にありましたので、高波が来ても安全な場所だった事は確かです。おそらくそのヘイアウの側あるいは、その一部に人が住んでいたのではないかと予測します。カヌーはその麓にある川のほとりに停泊させていたのでしょう。

時が経つにつれ、家族が増え、島の人口も増えて行きました。島の他の場所にも人々は移住し広がって行きました。岩に絵を描いて歴史を刻みました。その頃は文字というものはありませんでした。

この新しい肥沃な土地に色々なものを植えました。タロ芋、さつまいも、じゃがいも、ココナッツ、種々の薬草とオールマイティーでたくさんの用途のあるティリーフです。豚、犬、にわとりは、自由に走り廻り、数もどんどん増えていきました。カヌーが立ち寄る度に品種は増えていきました。パンの木、バナナ、ハラ、ククイ、ハウ、クズウコン、山りんご等です。カジノキも入って来て、衣服にするカパを作るのに使用されました。アヴァの根は薬として、また儀式に使われました。

土地は緑に覆われるようになり豊かな場所になっていきました。神々は、この島々を良い場所とみて、微笑んでくれたのです。すべてはポノでした。

生活はとてもシンプルでした。一日は夜明けからはじまり、仕事も同時にはじまりました。日が沈むと仕事は明日までお預けです。全員が体の汚れを洗い流し、家族と共に夕食の席を囲みます。食後は、皆で輪になり座ったまま、物語の時間です。神々の話、最初に島に着いた先祖の話、偉大なるマナを持った長老の話、家族

に起きた笑い話など、色々ありました。昼間に起きたでき事や従兄弟や友達がいる遠い島々の話などもしました。また祈りや歌を唄う時間でした。

モロカ'イ島に住むある女性には、二人の娘がいました。彼女は娘たちにノーズフルートや竹の筒、太鼓などの音楽に合わせて踊る事を教えました。長女、ラカの方は、カウア'イ島に行き、その踊りを広めました。彼女は、森の植物をまとして踊ったので、森の女神と呼ばれるようになりました。ラカは更にオ'アフ島、マウイ島、ラナ'イ島の大小さまざまの島々を訪れ、踊りを広めました。年老いてから、カウア'イ島に戻り最後までその島に留まりました。彼女は洞窟に埋葬され、ヘイアウとして、ハワイ諸島すべてのフラのハラウ（教室）が彼女に奉納する為巡礼する聖地となりました。

方々の島々からやって来る人々が定住して行き、家族となって行きました。ある時、有名なタヒチの家族が到来しました。女性たちは、エフ（赤いブロンド系の髪の色）で素晴らしいダンサーたちで、遊んでばかりいました。楽しむ事が好きで仕事はきらい、人生はエンジョイする為にあるのだと思っている人たちでした。それまで、この島に住んでいた人たちとは、かなり異なる性質の人たちでした。彼らは、きっと神の世界からやって来たのだと皆思いました。彼らは、カナカ マオリが信じていた人生の見方とは、全く違うものを持っていました。この新しく到来した美しい人々は、唄って踊って人生を楽しんでいました。家族の一員は、それぞれ後に神になっていきました。ペレは、火山の女神になりました。彼女が死んだ後、その骨はキラウエア火山のクレーターに置かれました。彼女の妹、ポリ'アフはマウナケア山の女神となり、お姉さんのナ マカ オカハイは、カウア'イ島のポリハレに住んでいて、そこに'アヴァパパ カヴァという植物を植え、マイ'アイリをナウイリウイリ港に植えました。彼女が海藻を植えたヘイアウは、カラニケレイケカイクムといひます。一番下の妹ヒ'イアカは、一生を遊んで歌って暮らしていましたが、最後は姉ペレの火によって殺されてしまいます（王子ロヒアウを連れて来るようにペレに頼まれたが、その約束を果たさなかった為）。ロヒアウ、ラカやその他の人々が住んでいた家の基礎が、カウア'イ島ケ'エの山の傾斜面に今でも残っています。

13世紀頃、たくさんの人々が到来しはじめた頃、一人の変わった人物が現れました。最初は、数隻のカヌーだけで来ました。彼は最初、港や潮の流れ、川等について多くの質問をしました。皆、彼に協力的で知りたい事は何でも教えてあげました。その男は、島から島へと渡り、質問し廻りました。そして突然現れたように、忽然と消えていきました。誰も彼の名前を知りませんでした。皆彼を「死をまっ

た男」と呼びました。彼は白いカパを着ていたからです。白いカパは、この島の伝統では死体を包むカパの色で生きた人間が着る色ではありませんでした。

忽然と姿を消したその男は、数年経って、また島に現れました。今回は、ものすごい軍団を引き連れて来たのです。チャント（聖歌）にその時の情景が物語られ残っています：「戦士たちの赤いマロ（ふんどし）で海の色が赤く見える程大勢立並んでいた」。サモアンとタヒチアンの戦士たちは、とても大柄で強そうでした。平和に暮らす事を知らない人たちでした。私たちの島々を占領する為にやってきたのです。ラナ‘イ島のチャントに残っていますが、その島では40人だけが生き残り、残りは惨殺されたのです。

ラナ‘イ島からカヌーに乗った軍団がモロカ‘イ島に向かおうとしている時、とても不思議な事が起こりました。ラナ‘イとモロカ‘イの間の潮の流れは、大変に強いのです。彼らがモロカ‘イに向かおうとしていた頃は引き潮だったので、強い男たちも太刀打ちできない程の強さで、岸に辿り着けません。その時、島の住民たちがカオイオの浜に集合して、戦軍のカヌーを見ていました。誰かがチャントをはじめます：「ヒナの土地は、全能。この島に着く事はできない」。他の人たちも一緒に唄いはじめ、全員が大声で唄うとその音が雷のように響き渡りました。侵略者たちは、後にこのチャントのせいで島に入る事ができなかったと言い、島にプレオオ(パワフルな祈り)という名前を付けました。その後、数世紀に渡り、モロカ‘イ島は、プレオオと呼ばれていました。

その後何百年という月日が流れ、血は混じっていきます。今日のハワイアンの中で、アリ‘イの血を引かない者はいないでしょう。反対にマカ‘アイナナ（一般人）の血を引かない者もいないでしょう。時を重ね、すべての民が織り交ざり今日に至っているのです。



MANA・マナ

マナは、ハワイだけのコンセプトではなく、太平洋の島々すべてに共通するものです。その力に向かって、惜しまず努力する者なら誰でも得る事のできるものです。マナは、個人の持つ力です。多くの方が勘違いしているようですが、深呼吸によって発生するものではありません。ただ深呼吸は、気づきが起きやすい状態を作り、道から外れないように手助けにしてくれる事はあるでしょう。

マナはDNAの中にあります。この理由からハワイアンは、家族間での結婚が習慣となっていました。家族の持つ強いマナを子供たちに引き継いでもらいたいと願ったからです。自分たちよりもマナの弱い家族と結婚すれば、家系全体の運気を下げる事になると信じられていました。

古代のハワイ、つまりアリイが到来する13世紀以前の時代では、教育はたとえ話、物語で行われていました。話の中に教えがあったのです。ほとんどの家族はこの習慣を19世紀中頃まで続けていましたが、キリスト教が入ってきてから、叙々に絶えていきました。モロカ'イ島とラナ'イ島が一番最後までその伝統を守ってきました。クプナ（長老、祖父母）がモ'オプナ（孫）に聞かせた話の中のひとつに「光りのボール」があります。

「すべての子供は、完全なる光のボール(器)をもって生まれきています。その光に忠実に進んでいけば、どんどんその光は強くなり、どんな事でもできるようになっていきます。サメと一緒に泳いだり、鳥と一緒に空を飛んだり、すべての事を知り、できるようになっていきます。でも、もしもその子が人を羨んだり、嫉妬したりするとその光のボールの中に石を投げ込んでしまう事になります。そして光は小さくなってしまいます。光と石は同じところにいる事ができないのです。もしもずっと石を投げ込むような事をしていけば、光は完全になくなり、その子は石になってしまいます。石は育つ事もできず、動く事もできません。でもある時、石でいる事に疲れて、そのボールをひっくり返し、石をすべて器の外に出してしまう事ができたら、また光は輝きはじめるのです。」

今日では、生まれて来た子供たちは、両親にとって「?マーク」の存在で、育てて行く内に発見して行くという感じでしょう。それは良い事でもあり、悪い事でもあります。昔のハワイでは、試行錯誤するような事はありませんでした。子供のマインドと体の健康状態、賢さ、強さを完全に信じ、神がお与えになる学びを受け入れる準備ができていた事も知っていました。人生のパートナーも想像以上に遥かに多くの選択種がありました。家族といっても、たくさんの従兄弟がいて、従兄弟もまた兄妹として親しい家族関係がありました。子供たちは、一組の両親のものというよりは、家族全体に属するという発想でした。「オハナ(家族)」のコンセプトは、現代の家族とは少し異なる観念で使われていました。

DNAを意識せずに、素晴らしい事を成し遂げる人たちがいますが、その素晴らしい功績を成し遂げるにはやはりマナなしでは起こりえないと言えるでしょう。どのように成し遂げたのか?その人たちは努力したのです。自分の信じる事に全力で専心したのです。大きな功績でなくてもいいのです。床を掃く事でも、池を掘る事でも、全力を尽くした人です。それができる人は謙虚さも知っています。謙虚であれば、すごい功績でも自慢する事はないでしょう。仕事に喜びを見出す事ができるのです。その仕事をする事自体が楽しみになってくるのです。ゆっくり進んでいるようでも、それは忍耐力があってこそできるのです。一つの目的に向かって進んでいます。兎と亀の話のように、夢と謙虚さを持つ者は必ず最後に勝ちます。人に勝つのではなく、自分に勝つのです。

偉大なる思想家、作家、音楽家、画家。。。皆この性質を持っています。スウィートでラブリーではないかもしれませんが。親しみやすい存在ではないかもしれませんが。マナは、けして甘い性質ではないのです。マナはパワーです。それをどのように使うかは、自分次第です。マナを持つ人には、その人の美德があります。人生のレッスンを積んできている人たちです。そのレッスンは、けして優しいもので

はなかったでしょう。何度も転んでは、また起き上がる事を諦めずに繰り返して来た人たちです。美德とは、たとえ自分が疲れていても、愛と情をもって困った人を助ける事から生まれます。謙虚さとは真に偉大な人たちに見つける事ができます。人を褒める事のできる人には、美德とマナを感じます。マナの入った器を持つ人は、けて文句を言ったり、自慢したりする事はありません。美德は、小さな事にも感謝できる心にあります。人生の中の小さな問題一つ一つが学びのチャンスだという事に気づく事から初めて下さい。その扉は理由があって、あなたの前に開いたのです。

みんな、すべてのものに感謝すべきです。良い事だけでなく、人生において与えられる、すべての機会に感謝する必要があります。

今日は、多くの障害があります (例：テレビのアメフトのゲーム観戦等)。多くの時間を無駄に過ごし、何も達成しないでいます。世界中でたくさんの事が起きています。個々に自分の境界線というものを築き、しっかりと価値ある時間を守って、前に進んでいかなければいけません。

こんな時代でもマナを引き出す事は可能です。人は、まだ鷹と空を飛んだり、サメと泳ぐ事ができる可能性を秘めています。生き物は、誰が自分の兄妹かを知っているのです。‘アイナ (土地)、植物、海をいたわり、必要以上にとらない、助けを必要としているものに口だけでなく、手を差し伸べる事ができる人。おもちゃを手放し、人生を歩もうとする人。みんなマナを得たいと言いながら、その代償を払いたがりません。その代償は大きいかもしれませんが、戻ってくるものはもっと大きいのです。

とてもチャーミングでカリスマ的な存在でも一滴のマナもない人がいます。自分が達成したい目的の為に人を利用する人は、中身のない人です。全く中が空っぽな人です。このような人を誰でも一人は知っているでしょう。真の偉大なマナを引き出している人は、おそらくそれを探す事はしないでしょう。自分のやるべき事に忙しくしているからです。マザーテレサはその一人です。彼女は、目の前のやるべき事をひたすらこなす事が人生の務めだったのです。マナを得る為にはどうしたら良いか?などと考える事などありませんでした。彼女にはすでに大変豊かなマナが備わっていたからです。

昔は、自分の専門の仕事に従事し、努力した者はカフナ、マスターと呼ばれるようになったのです。船乗り、航海術、鳥の羽を取る仕事、予兆を読む人 (天気あるいは現象を読む)、予言者、ヒーラー (ロミロミや薬草などを使用)、カヌー作り、漁、等等、色々な専門の技、仕事がありました。これらは、すべて通常の生活の一部でした。そして、それに専念し、よりうまくなろうと努力して、より知識を深めていった者が、強くなり、いつしかその仕事と一体になって行くのでした。

マスターしたと言えるところに到達します。その時点で、彼／彼女は、マナに満たされた状態になっているのです。

マナの祈り

母なる神、父なる神が我々にお与えて下さいました祝福に大変感謝致します。

祝福を受け入れ、感謝すると共に、その力を必要としている人々に
分ち合っていく事に努めて行きます。

パウ（完了）、この祈りを飛ばします。

高次のマナの雨が祝福になって降り注ぎますように。

大いなる感謝を贈ります

エド マヌ オ ヴァイメア グラボスキー



‘Ohana ‘オハナ

家族あるいは、‘オハナは、人生の基礎となるものです。ハワイと西洋の家族の概念は、大きく異なります。西洋では、父親と母親がいて子供(たち)がいます。祖父母が含まれる場合もあるでしょう。ハワイの家族観では、その人間の家族以外にも、土地、海、森、植物、虹、海の中の生き物、陸の上の生き物すべてが‘オハナです。これらすべてが我が子あるいはお年寄りのようにめんどろを見、愛情を注ぐ家族なのです。昔のハワイでは、もしも親に何か起きた場合、その子供は家族の他の親族の元で育てられます。年長者の夫が他界し、妻が残された場合、やはり親族の男性の元にいきます。宣教師の用語を使えば、妻となるわけですが、妻の意味は西洋の観念と同じではありません。家族は近い血縁でも遠い血縁でも同じように家族として、一丸となっていたのです。

虹もまた家族でした。虹も私たちに話かけます。虹にも種類が色々あり、それぞれ違うメッセージをくれます。虹は、私たちの霊的家族からのサインなのです。

家族は、目に見える人たちに限らず、他界したすべての先祖を含みます。モ‘オ族が語るタイム・ドラゴンの話では、すべてのハワイアンが家族にあたる事になります。

龍の頭はあっちにこっちにと動きます。目は一つの星を探し追い求めるように動いています。また新しい夜明けを見つけようとしているのです。前足は、‘オピオ、子供たちです。いつも忙しく、いつも動いて、元気一杯で、安定感はないけど常に動いている状態。‘オピオの後ろには、マクア、親たちがいます。家族に食事を用意し、寝床を与えます。走り廻る子供をなだめ、一日の定められた仕事もこなします。その後ろには、クプナ、祖父母たちがいます。家族の長老たちです。彼らは賢者です。彼らの足は安定していて確かです。家族が円満に行くように、子供たちの動きが過剰にならないように見守っています。長老たちは岩につないだ手綱のように家族をつなげてくれている存在です。自分が誰なのか、どこに行くのかをはっきりと認識しています。家族に落ち着きと安定感を与えてくれる存在です。

クプナの後ろには、カイヴィ（骨）、先祖がいます。一つ一つの頸椎が一世代の先祖たちです。それぞれがやってきた事、子孫の為にやってくれて来た事があります。彼らも家族です。カイヴィの後ろには、‘アウマクア、家族の守護霊がいます。すべての源になる存在です。私たちがはじまったところで、多くの援助が今でも来ている源です。

すべての家族の部分は重要で、同等の立場にあります。それぞれが次の動きの準備をしていて、新しい任務、新しい命の生まれる方向にタイム・ドラゴンが作動していきます。

アリ‘イが到来する前（13世紀以前）は、家族という観念だけが人々の信仰心の元でした。人を傷つけない、お互いを尊重し、自分も尊重する事。自分たちの仕事を謙虚にこなす事。亀やサメも兄妹とみなしていたので、一緒に泳ぎました。魚も食事の為の必要な量以上は獲りませんでした。獲る時も子供たちがお腹を空かして待っているからと魚に説明します。当時は小さなコミュニティで暮らしていて、皆家族でしたので、全員の分を用意する必要がありました。

その頃は、家族がいない人たちはいませんでした。年寄りや病弱な者は、小さい子供のように愛され、皆大事にされ、大切な家族の一員でした。クプナは、その時代115歳から120歳まで生きるのが一般的でした。

各家族には、それぞれの家族のシンボルとなるものがありました。家族ごとのカパに紋章となる色とデザインがありました。モ‘オ（龍）族は、サフロンのカ

パをまといました。サメ族は、グレーとブルー、マウイ島の雷族は、最も濃い黒のカパをまといました。家族ごとのカパにスタンプするデザインがあり、髪型もありました。もしも、あなたがモ'オ族だとしてモロカ'イ島からラナ'イ島まで旅したら、人は、あなたがカマロあるいはカウナカカイという事がカパのデザインで見わかります。両方共色はオレナあるいはサフロンです。

タトゥー（入れ墨）も家族もアイデンティティーとして使われました。家族によって異なったデザインを彫りました。マウイ島の男達が一番たくさんのタトゥーを彫りました。人によっては頭のとっぺんから足の先まで彫っていました。ハワイ諸島全域でタトゥーは盛んでしたが、マウイ島程ではありませんでした。

実際にタトゥーは、アリ'イたちがタヒチから到来する以前、どれ程度盛んだったかは定かではありません。アリ'イ到来以前は、カパのデザインと髪型で家族を判別する事ができ、タトゥーは然程盛んでなかったと推測します。アリ'イ時代以降、カイアケアの子孫は、指の裏側にタトゥーをしたという事は聞いています。これは、戦わない、平和主義だという証として、拳の表ではなく裏側に彫ったのです。

サメ族は、波模様とフィンのデザインを家族の紋章にしていました。この二つだけは確かですが、昔の事なので、それ以上はわかりません。モロカ'イ島のモ'オ族と他の島のモ'オ族は違ったタトゥーのデザインがあったようですが、どんな違いがあったかはわかりません。モロカ'イ島のモ'オ族だけが指に入れ墨をしていました。これは家族の紋章として彫ったものです。西洋の影響が入ってきた後、タトゥーは、全く違う理由で盛んになりました。

それぞれの'オハナというコミュニティでは、子供は家族全体の子供という扱いを受けます。本当の母親や父親が誰かというのは、知らないで育ちます。家族全員に愛され、めんどうを見てもらい、食事や衣服の世話をしてもらいます。長老たちがそれぞれの特技を見極め、子供たちは幼い頃からその技の練習をしていきます。時には生まれた時に何か啓示がある場合もあります。例えば、カヌーを作る職人になる場合、それはたいてい男の子です。そして、その子はカヌー作りの達人のカフナのもとに預けられます。そして、そこで達人の仕事をずっと見て、木を切ったり、彫り始める前にどういう作業や準備が行われるか学びました。今日、見習生と言われるような立場です。

子供たちには自然に向かう方向に教えていただけでした。もしも、その子供がやっている事に興味を持たなくなり、他にやりたい事が出てきた時には、（これ

は滅多に無い事でしたが) 長老たちが集まり子供と一緒に話し合います。皆が幸せであってほしいので、無理強いをする事はありません。時には、啓示が変わる事もあり、人間も同じで心変わりするのです。ですから、進路を変える事も時には必要な場合があります。目的は、みんなが自分のやっている事に満足し、仕事に喜びを見つける事でした。古代の人々は、日々の厳しい労働の中に喜びを見出して生活していました。

アリイたちが到来してから、生活はもっと難しくなりましたが、少なくとも家族についての価値観は同じだったので、その部分は以前と変化なく過ごす事ができました。タヒチアンのアリイ、チーフたちがハワイ諸島に侵略してからは、島の住民はすべて彼らの作った法律に服従しなければいけないと言いました。アリイの税金を納めなければいけなくなり、また多くの土地を占領され、そこに住んでいた人々は自分の家族の土地を失っていったのです。土地を奪われた人々は、他の家族に土地を分けてもらいました。土地は皆が暮らせる程十分な広さがありました。

アリイの家族の観念と私たちのそれとは大変似ていました。しかし、アリイたちの方が厳しいルールを持っていました。自分たちの家系の血を一般人とは混ぜないというルールでした。でも実際には起きていました。それが見つかったと、その子供は殺されました。又違うアリイの家族が父親であった事が判明した時には、その子供の母親が殺されました。私たちハワイアンの間ではそういう事は全くありませんでした。誰の子供であろうと歓迎し育てたのです。

ポリネシアの住民に共通して言える事は、みんな‘アイナ(土地)とその上に生きる、植物や動物、すべての命を家族だと考えた事です。ただし、アリイたちが到来した時、多くの住民が惨殺され、アリイに服従し貢がなければいけない法律ができました。彼らは、仕事をしたくなかったので、週に一日は、一般人がアリイたちの食料の為に仕事をする事を強いられました。しかし、時が経つにつれ、アリイたちも畑仕事、漁、網作りなどが喜びになり、その技術を知り、うまくできる事が楽しみとなって行きました。更に時が流れ、彼らは、ハワイ諸島での暮らしに馴染みはじめ、マカ‘アイナナ(一般人)の習慣を取り入れて生活するようになります。税金は、変わらず納めていましたが、最初の頃に比べると昼働いて夜は寝る時間が取れるようになり、昔の時代のサイクルに戻って行きました。ハワイ諸島を統治したパイエア、カメハメハ1世は、オアフ島一帯に畑を所有していました。そして、彼自身が一般人と一緒に労働をしている姿を見る事ができました。更に、ハワイ島のカヴァイハエでヘイアウを築く時にも、皆と共に岩を運び、汗をかき、早朝から日暮れまで重労働に参加しました。もちろん、一日中遊んでいるアリイたちもいま

したが、けして多くはありませんでした。遊んでいる者たちは、マナがなく、ただ快楽を求める浅はかな人間と見られていたので、けして重要な任務に就く事はありませんでした。

今日のハワイでも家族というユニットは、とても大切に考えられています。テレビやパソコンなど、多くの障害が増えたので、昔程容易ではありませんが、週末は家族でビーチに行き、おじいさん、おばあさん、親たち、たくさんの子供たち皆が一緒になって楽しんでます。



Kahuna カフナ



この言葉ほど、ハワイ語の中で誤解を招いている言葉はないと思います。今日、人々は、すべてのカフナがカフナ 'アナアナだと勘違いしています。このタイプのカフナは、極少数ですが確かにブラック マジックを実践していた人たちです。カフナとは、自分の仕事をマスターした人の事をいいます。一人あるいは一人以上の事を示します。ナ (Na) は、複数を表す時に使います。例えば、マカ'アイナナとは、一般人、直訳すると「土地に住むたくさん目の目」という意味です。

言葉の意味は、時代と共に変わって行きました。元来は、「カフ」がいて、何かの世話をする、決められたある仕事に従事する人の事を指しました。「ナ」は、複数を表します。人々が信じるような事実はなく、この言葉に秘密はありません。「カフナ」は、秘密のキーパーではありませんでした。工芸などのマスターたちだったのです。達人を表現する時に使った言葉です。その人が従事する仕事に対して、素晴らしい技術と知識を持っている達人の事をカフナと呼んでいました。

彼らは、魔術を使ったり、邪悪な事をする人たちではありませんでした。極少数ですが、非常に能力にたけたカフナたちの中で、その力を悪用し、人を死や破

壊に貶めるような事をしたのは事実です。これは通常、チーフの耳元で、「もう一度ポノを取り戻す為には、数名のカウヴァ（不可触賤民）たちを生け贄にする必要がある」と囁く事により、実践されてきました。賢いチーフなら、そんな囁きを信じませんでした。中には、自分で判断できずにいるチーフがいて、彼らの言う事を信じてしまったのです。ハワイ諸島は、多くの犠牲を経験して、平和とはけして言う事のできない恐怖の時代が続きました。ハワイ島のチーフ、ウミは、誰に言われずしても次から次へと些細な理由で人を処刑していました。ウミの母親はアリイ出身ではなかった為、常に自分の身を守っていかなければいけないという境遇がありました。もしも彼が正当な跡継ぎとして生まれていたら、彼もこれ程悪行を行う人間にはなっていなかったかもしれません。

マウイ島のカマララヴァルは、もう一人の愚かなチーフでした。他にも数名いましたが、彼らは、当然神官ではありませんでしたし、例外なる異端児たちでした。通常アリイあるいはチーフたちは、ヘイアウに神官を従えていましたが、その神官たちは、ただポノという目的の一つに向かって進んで行く事を望んでいました。

ハワイの戦争は、世界の他とは異なり、スポーツに近い感覚で行なわれていました。両者共準備期間が1年ありました。一人のチーフが戦線布告をする時には、相手に二つの石を送ります。一つは白、もう一つは黒の石です。受け取った相手は、それを受け入れるか、拒否する事もできました。大抵は受け入れられ、そこかれ戦略が練られます。戦闘開始の時には、最もマナの強いチーフが飛び立つかのようにケープを広げるのが合図でした。カヘキリというチーフの話があります。彼が戦闘開始を合図した時、ケープが鷹の羽のように広がり、朝日が彼の後ろから昇り、敵の目の中に入り、矢を打つ方向を見えなくしたという話です。

戦争はスポーツのように見られていました。土地を奪い合う事にはなりますが、男たちにしてみると、日常の退屈な作業から離れる刺激でした。一年間トレーニングをし、戦場に向かうのです。アドベンチャーのようなものでした。

戦争の戦略の達人であるカフナもいましたが、最終的な判断はチーフによって決められました。そのカフナは、カ'ア カウアと呼ばれ、何回にも渡り戦争を経験して生き残った人です。どのように生き延びたのか、その経験を元に注意点や戦士たちの動きを把握していました。彼はハラウ（教室）を持ち、毎日数時間、矢を射ったり、飛んできた矢を掴む練習に励みました。頭蓋骨に矢が刺さらないように、ヒョウタンからヘルメットを作り、戦う技術を学びました。

すべてのヒーラーはカフナと呼ばれていました。産婆、骨接ぎ、マッサージ師、薬草で治療する者、手をかざした治療法等がありました。けして人を傷つける

為に使われる事はありません。彼らは人を助ける使命を持っていました。彼らはカフナ、達人でした。

工芸の達人の中では、おそらく木を切り倒しカヌーを作るカフナが一番大きなマナを持つと見られていたと思います。正しい木を選び抜き、その木を正しいバランスに切り抜かなければいけませんので、これは偉業といえるでしょう。カヌーもそれを作る人もポノでなければ完成しません。

生活に必要な仕事すべてにそれぞれカフナがいました。釣りの達人、漁網作りの達人、農作業の達人、鳥を殺さずに捕まえる達人（ケープやヘルメットに羽を使うので、一羽から少量ずつ取る）、カパ作りの達人、彫刻の達人等、その他にもたくさんの専門職がありました。

カフナ ホ‘オピ’オピ’オは、今日悪意のあったカフナの事を指すようですが、モロカイ島のマカヴェリヴェリがこの手のカフナとして最初の人物です。彼女には悪意はありませんでした。彼女が主に教えていた事は、人が持つ悪意を受け取る必要はないので、悪意を元の人のあるところに戻す方法でした。彼女はいつも守りの為にティーリーフを着けていました。彼女のハラウの廻りには、ティーリーフが植えられています。彼女がどこかに行く場合には、ティーリーフの束を持っていきました。彼女のティーリーフは、彼女の先祖が埋葬されている土の上で育ったものですので、そのティーリーフを持っていくという事は、自分の先祖を連れていく事になるのです。

今日、家のお祓いがされる時はティーリーフが使われます。ハワイアンが葬式に出席する場合、ポケットにティーリーフを入れていきます。裁判で裁かれる境遇になった場合にもポケットにティーリーフを入れていきます。病院に入院する事があった時もティーリーフを持って行き、枕の下におきます。これは、先祖霊たちを自分の側におき、自分を守ってくれる事になるのです。

人々は、カウラとカフナを混同している事が多いようです。カウラは、聖人であり、時間を旅したり、肉体から離れ姿を変えたり、あるゆる事ができました。何かの達人だったかもしれませんが、それを敢えて語る必要のない存在です。私たちの時代には、ただ長老として知られていた存在でした。廻りの家族は、その人の持つ未来や過去を知る才能を知っているという感じでした。もしかしたら、「時空のカフ」あるいは「カフナ マナヴァ」と言えるかもしれませんが、そういう呼び名は聞いた事はありません。彼らはカウラとしか呼びようがありません。

カフナ、カウラはすべて過去のもので、古代の秘技を教えると言っている今日の先生たちで、カフナになった証明書などを渡している人たちは、単に儲けようとしているビジネスマンです。本来あり得ない事です。



‘Aumakua ‘アウマクア



‘アウマクアは、源です。ここから始まっています。家族のエッセンスです。イエス キリストが最後、弟子たちに別れを告げた時に話したスピリットと同じ存在です。彼は、コンフォーター（慰め）を寄越すと言いました。それは、ホーリー スピリット(聖霊)、の事で自分の事を示唆していました。この観念と‘アウマクアは同じです。最初は、霊から始まったのです。私たちは最初は霊だったのです。私たちの源です。

古代は、‘アウマクアに、健康、許し、手助けの祈りを捧げました。‘アウマクアを持たない家族はいませんし、家族を持たない‘アウマクアも存在しません。両方の存在があって、はじめて完全なものになるのです。

その頃は、すべての家に小さな祭壇があり、お供え物がされ、先祖や‘アウマクアを祀りました。’アウマクアが源と考えられていて、家族の一部であり、生まれた時から死ぬ時まで、ずっと共に歩いてくれる存在です。‘アウマクアは、家族が通ってきたすべての経路を見ており、すべての痛み、病気、良き事も目撃しています。他の存在に祈るといのは、考えられない事でした。私たちには家族の存在しかなかったのです。

アリ‘イたちにも、’アウマクアが存在しました。しかし、多少の違いがありました。彼らは、ティキというものを持ってきました。とても大きな不思議な姿でした。そして、そのティキを聖地に置きました。彼らの‘アウマクアは、この木像の中に入り、自分たちの聖地を守ってくれるのだそうです。’アウマクアは、何にでも侵入できますし、その一部になる事もでき、人間の中に入る事もできるのですから、この強面の木像の中に入る事も当然できたでしょう。

時が経つにつれ、学校やハラウが‘アウマクアを持つようになりました。工芸品の一つになってしまった感じです。カヌー作りの職人も’アウマクアを持ち、バード・キャッチャーにも‘アウマクアがいて、ヒーラーにもカパ職人にもそれぞれの‘アウマクアが存在するようになって行きました。信仰は時代と共に変わっていきました。私は口伝の歴史として、サメ族はサメに導かれてこの島にやってきたと聞いています。その為、お互いを家族とみなすようになったと。モ‘オ、龍族については、ハワイ諸島とその周辺には、龍が存在した形跡はありませんので、おそらくアジアにそのルーツがあるのでしょう。太古の時代、ある家族がある種の生き物との繋がりを感じ、‘アウマクアがその生き物に憑依したと感じたのです。それ依頼、その鳥あるいは動物に‘アウマクアが生息して、見守ってくれていると信じられてきました。モロカ‘イ島のモ‘オ族は、よく自分たちの足の爪を見比べました。みんな爪が龍のようなカギ爪になっていました。現代医学によると、それは真菌から生じる症状なのだそうです。当時はそれがモ‘オ、龍族の証だと信じられていました。

今日、‘アウマクアは、語弊があるようです。テレビでは、’アウマクアはトツテム ポールのようなものだと言っていました。ハワイにはトツテムなど存在しませんでした。ティキは、ハワイの‘アウマクア自身とは全く異なる存在です。それは、木を彫って作ったもので、’アウマクアを呼び込んだ時にはじめてその中に‘アウマクアが入り、聖地を守護する生き物となったのです。常時その中に存在したわけではありません。呼ばれた時だけ来るのです。数百年後に、ハ‘オレ（白人）の神が私たちに紹介され、人々はキリスト教に改宗していきますが、私にとっては、自分の先

祖に話しかける事だけが自然でした。古代の人は、マナを多いに持っていました。イエスは、ハ'オレの神の息子だったかもしれませんが、彼はハワイに来た事はありません。彼は私たちの家族ではなかったし、私たち家族が持つ問題を理解していたわけではありません。ゆえに、'アウマクアは、キリスト教と平行して、この土地で生き続けてきました。今日、私たちは、'アウマクアは、ガーディアン・エンジェルのようなものだと説明します。カトリック教会が、ハワイアンの昔の風習を知った時に、そのように説明すれば納得してくれました。「罪」にはなりません。ハワイアンの信仰だと言えば罪となり、刑務所に入れられたり、罰金をとられたのです。

あなたが5,60年前に年輩者に祈りについて質問したとします。「あなたは、昔からの風習を続けましたか？教会の為に古来からの'アウマクアを見放しましたか？」彼らはきっこう言うでしょう。「私は、家族のスピリットたちに祈るよ。彼らは私たちが必要なものを知っているからね。彼らは、自分たちが辿ってきた道を見て来ているし、私たちの労働、背中の痛み、照り返す太陽も、心臓の痛みも見ていて、愛する人が他界して行くのも目撃し、親戚の事もすべて知っているからだ。会った事もない人を崇め、彼らを見放す事がどうしてできよう。イエスはとてもパワフルな存在で、何万人という人々が彼に救いを求めている。自分を見守ってくれている先祖が既にいるのに、私がなぜその一人に加わる必要があるのか？'アウマクアは、私の願いを聞きたいと思っていて、助けたいと思っている存在で、毎日を共に歩いてくれている存在だ。」半世紀前の年輩者なら、皆同じ事を感じていたと思います。

今日、家族は大きく混血しています。一つの'アウマクアを持つ家族は一部で、例えばウナギ族は、他の諸島から来た種族ですが、現在はハワイアンとみなしています。時代と共に変化しています。現代では、昔の仕来りを知っている年輩者はほんの一握りです。当時の'オピオ（年少者）が現在の最後の年輩者です。その為、多くが誤った情報として伝達されており、'アウマクアの意味の誤解を招いています。

'アウマクアは、ハワイアンでなくても持っています。今生きている人たちは、皆あなたの家族です。全く同じ意味にはなりませんがアイディアは同じです。アメリカン・インディアンも熊族、きつね族、へび族など色々ありました。それぞれの家族がスピリットにアイデンティティーを持っていました。それは、彼らがハ'オレからできるだけ遠ざかって暮らしたおかげです。ハワイでは、残念ながら、西洋の影響は土地を奪っていったばかりか、人々のハートもマインドも奪ってしまいました。古来のものは、今ではほとんど残っていません。

スピリットが私の前に現れている時、大概香りがするものです。カイリ'オヘがココと私が「夜の虹の物語」を書いていた時に、やって来る時には、ハラ（植物の一種/タコノキ）の香りがとても強くおってきました。今、ハラが強く香って来る時には、それがココだとわかります。彼はこの本を手がける事に夢中になっていましたので、すぐにわかります。既に彼が他界する前の数年から彼の衣服からハラの香が漂っていました。

私は一度言われた事があります。私たちが助けを求めると、彼らは来なければなりません。でも彼らには彼らの世界で学ばなければいけない事があります。私たちが、いつも助けを求めていれば、彼らをペア（停滞）、この世に留まらせてしまう事になります。私たちは、どんな古代の先祖でも呼び込む事が可能です。彼らは、ここに留まり助ける事に従事する事を決めた存在です。いつもあなたの側にいます。最近他界した者を呼び寄せる事もできます。でも一番良いのは、自分で自分の問題を解決し、先祖には感謝のみを送る事です。自分の先祖だけでなく、すべての先祖に感謝を送るのが望ましいです。私たちは所詮皆家族なのです。



Pono ポノ

善良であるなら、バランスがとれているなら、正しいなら、助けとなるなら、正義であるなら、正す事なら、責任をとるなら、思いやりであるなら、尊重する事であるなら、礼儀正しければ、謙虚な態度、整頓された状態、平和的な態度、適切な態度、それは、すべてポノです。

ポノになる事は、昔の人々がそうありたいと思っていた状態です。もしも誰かが善良な状態から足を踏み外しそうになったならば、適切な態度、行動でない方向に行ってしまったなら、家族の長老たちは、その人にポノである事の大切さをもう一度教えます。「自分の光のボール（器）をひっくり返して、中に入れてしまった石を全部出さない、そうすれば又光は輝きはじめます。」と言います。もしも、その子が石を手放す

事ができない場合には、家族でホ‘オポノポノのセッションが行なわれました。家族の中にポノでない人がいたなら、家族全体に影響が出ます。自分や人を傷つける事は、廻りの人皆も傷つける事になってしまうのです。

ホ‘オポノのセッションでは、家族のメンバーが全員出席し、一人一人が話す機会を与えられます。通常は、皆が思いやりのある態度で望みます。家族やコミュニティーは、日々がポノな状態で進行して行かなければ、それ以上前には進めないからです。すべてのバランスが崩れてしまいます。家族全員がその事を承知していました。誰かが長老たちの決めた規律、ポノな態度で生活する事ができなかった場合、彼は忠告を受けます。そして、それでも改められない場合には、ホ‘オポノの家族会議が行なわれます。それでもまだ変わらない場合には、その人はコミュニティーを出ていかなければいけません。それで終止符が打たれます。彼の皮膚に刻まれている家族の紋章となるタトゥーは消され、それ以降誰も彼を見る事はなく、話す事ありません。彼は放浪する魂となります。彼はカウヴァ(不可触賤民)となります。



「フナ」は、ヨーロッパや米国において、人を癒したり、破壊したりする魔術を使ったハワイの宗教として知られています。フナは、その宗教の神官であり畏れられていたカフナという存在が持っていた秘密だとしています。

上記の内容は、大変興味をそそる内容ですが、残念ながら「フナ」は、全くハワイのものではありません。あまりにも有名になり、多くの書物がそれについて出版されている為、今日のハワイアン若者たちでさえ、多くがこれをハワイのものであると勘違いしています。

1917年、ある若者がハワイに学校の先生としてやって来ました。ハワイ島の色々な学校で三年間教師を勤めました。彼の生徒の多くは、ハワイアンの血を受け継いでいる子供たちでしたが、彼が古代のハワイの生活について訪ねると皆にこりと笑って、頭を傾げました。機会があれば、生徒たちの親達にも訪ねましたが、反応は同じでした。これを理由に彼はハワイの歴史はすっかり絶えてしまい、誰も過去の事を知る人はいないのだと思うようになったのです。

この教師の名前は、マックス フリーダム ロングです。彼は、教師としての契約が切れた後、ホノルルに引っ越し二年間写真屋に勤めました。彼は、アストロ・プロジェクション（幽体離脱）、ヒーリングやあらゆるマジックに興味を持ってい

ました。彼はうわさにカフナという神官があらゆる事ができると聞きました。しかし、誰もが現在カフナは、もういなく、その秘技も彼らと共に葬られたと言いました。彼は、ハワイアンは、愚かにも自分たちの歴史をすべて過去に葬り、カフナと共にすべてが死滅したという結論に達しました。愚かなのは、彼の方です。彼は、その時代ハワイの風習を続ける事もハワイ語で記録する事もハワイ語を話す事もハワイ式のヒーリングのような治療もすべて法律で禁じられている事を知らなかったのでしょうか。もしも見つければ多額の罰金あるいは禁固刑の可能性があったのです。スパイは方々にいて私たちを見張っていました。カリフォルニアから来た白人の教師等は、最も信頼できない人物だったのです。

ハワイの歴史、系譜、自然治療、薬草学、言語は、すべて家族の中でのみ生き続き、子供たちは「けして家族の外で、この事を話してはいけませんよ」と堅く繰り返し言われていたのです。これらの家族の智慧は、hunāhunā（フナーフナー）と呼ばれていました。しかし、ロング氏は、これを知る事はなく、他のソースから自分なりの見解を見出していったのです。

ロング氏は、カリフォルニアに戻り、刑事ものを書く小説家と結婚しました。彼も殺人ミステリーを書きましたが成功しませんでした。彼は、"The Unknown(未知の境地)" というオカルト雑誌に記事を書く仕事もしていました。そこに、彼はカフナの魔術の実践に関する興味について書きました。古代のカフナがどのような事を実践していたか、彼の想像で書きました。その記事は読者の反響を呼んだようですが、雑誌社からの報酬はありませんでした。この経験から彼の中にアイデアが生まれたようです。彼のホノルルの友人ティオドル ケルシー宛の手紙には、自分には大きな負債があり、人からお金を借りて生活している事、読者の想像を掻き立てるような面白いものを書きたいという事が書き記されてあります。

1935年、ロング氏はケルシー氏にコメントをもらう為に、自分の書いた原稿のコピーを送りました。1936年3月25日、ケルシー氏は彼に返事を出しています。手紙の中で彼は、ハワイ大学のベクリー教授に彼の原稿を見せたとあります。そして、ベクリー教授がその内容について思わしくない内容である事を指摘しました。彼の説明する'アウマクア、ウニヒピリ、アカなど多くの言葉の語意が間違っている事も指摘しました。更に、ロング氏がウィリアム タフツ ブリンガムが彼の情報の源で、彼のヒーローであった事に対する記述も芳しく思っていないでました。ブリンガム氏は、その時点で既に他界していた人物で、彼はハワイアンの思い出話の収集家でもなかったのです。彼は植物学者でした。ベクリー教授は、彼がブリンガム氏を彼の情報主として記述するのは、不適切であると指摘しました。この返事を読んでも、ロング氏は全くそのコメントを受け入れようとはしなかったのです。

その原稿とロング氏とケルシー氏の手紙のやりとりは、すべてハワイ州文書局に保管されています。1997年、私はロング氏の書いた内容に賛成できなかったので、ロング氏がプリンガム博士から一体何を学んだのか知りたくて、ビショップ博物館でリサーチをしました。プリンガム博士の残した何年にも渡る日記を一頁一頁読み、誰と会ったか、色々な出来事について書いてありました。彼の買い物のレシートまで残してあり、何を買ったかまで知る事ができました。彼は足の痛みや咳が出る事などについても書いてありました。天気についても書いてあり、すべてはそこに残されていました。しかし、マックス・フリーダム・ロングという名前は一度も出てこなかったのです。1982年にチャールズ ケン、ルビライト ジョンソン、キロラニ ミッチャル、アビー ピアナイアや他から話は聞いていましたが、自分の目で今それを確かめる事ができました。

ロング氏は自宅で小さな勉強会をはじめました。メンバーは12人くらいいました。ケルシー氏宛の手紙に、その中の二人しか「カフナイズム」に興味がない事について不平を漏らしています。更に、彼はイギリスから手紙をもらい、その人が北アフリカのバーバー族についてリサーチをしている事について書いてありました。そして、バーバー族が自分たちの宗教を「フナ」と呼んでいる事、ハワイアンが遠い昔一時期バーバー族に属していた事が書いてあったのです。（勘違いしたのは、このイギリス人だけでなく、アブラハム フォルナンダーもその一人で、彼はハワイアンが元々絶えたイスラエルの一種族であると考えたのです。言語に共通あるいは似た言葉が多く、バーバー族も古代イスラエルと同じセム語は話したからです。）

現在年代測定の技術が進化し、DNAによってポリネシア人がどこから来たのか科学的に証明されました。最初のポリネシア人は、アジアから来ていたのです。言語は、フィリッピンの方言の一つであるタガログ語が由来する所と同じ所に発祥した古代語がルーツです。南カルフォルニア大学のパトリック カーシュは、パシフィック・リム（太平洋を淵取る地域）の人類の年代／経路測定の研究に20年従事していました。彼は、ハワイの手斧をアラスカ、ニュージーランド、イースター島で見つけました。これは古代ポリネシア人が太平洋を何千年もの間広い範囲で放浪していた事を証明しています。サモアンやドンガンが一つの島に定着した最初の人たちです。それ以外の人たちは、更に2000年程放浪生活を続けました。そして現在のハワイ諸島と呼ばれる島々に定着し始めるのです。最初に定着した人々は、モロカイ島のハラヴァ渓谷に住んだようです。この渓谷の一番上にあるマナヘイアウは、ハワイ諸島全域の中で最も古い遺跡だとされています。

マックス フリーダム ロングは、自分の勉強会でよく研究したようです。興味のある人たちに小さな定期刊行物を郵送していました。カフナについてだけではなく、色々な事を話し合っていました。本を出版した事により、彼の名は永遠にフナと結ばれています。彼の後を継いだ人たちは、彼の書いたものを基本にし、ハワイという原点に来て調べる事はしなかったのです。私が思うには、彼はチャールズ ケンから多くの情報を得たのではないかと推測します。彼らは1940年代に会っています。チャーリーは長年カリフォルニアに住んでいましたが、彼は半分ハワイアンで母親は純粋なハワイアンでした。チャーリーは、後にこう語っています。

「マックス ロングに出会ってなければ、おそらく、ぼくは昔のハワイの事をこんなに知る事はなかつただろう」彼はロング氏と長年に渡り連絡をとっていましたが、あまりにも事実とかけ離れた内容を彼が書いているのを知り、縁を切ったとの事です。またロング氏がウィリアム タフツ ブリンガムには実際に会っていなかった事もわかりました。

フナは、ハワイ語で「砂の粒のように、とても小さく目立たない」という意味です。ロング氏は、「砂粒」をずいぶんと拡張させて意味を作り上げました。彼がハワイ語をきちんと学んでいたなら、せめてフナの上にマクロン（長音記号）をつけて、hunā(フナー)としていたなら、また意味は違います。フナーは、「秘密を持つ事」という意味です。誰でも秘密を持つ事はありますから、これは特にカフナの秘技という意味ではありません。これは、フナーフナーの省略語で、家族、伝統、言語、系譜、信仰の中の秘密という意味です。

今日、フナは、瞑想、深呼吸、ポジティブ・シンキングを実践するニューエージ的な宗教です。別にそれが悪いと言っているわけではありません：その反対にとっても良い事もあります。ハワイの人々は、フナの創業者、マックス フリーダム ロングが書いた事は間違った内容である事を知る必要があります。彼は単に売れる本を書きたかっただけです。フナを信仰しているグループは、彼と決別し、前に進む必要があります。もう1920年ではないのですから。学校でハワイ語が教えられています。歴史や文化は、フラのハラウやハワイアンが設立した団体で学ぶ事ができます。ハワイアンのリーダーが書いた素晴らしい本がハワイ中の本屋さんでたくさん販売されています。私たちハワイの市民としては、それらに目を向けてくれる友が必要です。そういう人たちは、失いたくありません。次世紀には、共に前に歩める事を願います。

‘IMUA イムア



人生はタペストリーのようなです：たくさんの色の糸が交差して行ったり来たり。やがて素晴らしいデザインが出来上がります。私達は生きながらの織士なのです。自分という存在そのものに仕上がるのです。一つ一つの行動が一本の糸となり織り込まれていくのです。

21世紀に入ろうとしている今、私たちの生活は先祖のものとは本当に違うものになっています。ハイテック産業が著しく発展し、すべては早いスピードで動いています。一緒に進んでいかないと落ちこぼれてしまいます。この時代に生きる私たちの決断一つ一つもタペストリーの本一の糸として織り込まれていきます。家族は側にいますか？正しい場所にいますか？ポノを維持していますか？ポノでない時には、それを改めようとしていますか？目的から目をそらしていませんか？依存、執着、妨害となる事をどれだけ人生の中に取り入れていますか？きちんと境界を守っていますか？常にこれを秤にかけて、自動的にできるようになるまで、自問自答していかねばいけません。これができるようになれば、それは美しいタペストリーに仕上がる事でしょう。

アロハの精神は、ハワイ ネイ（ハワイアンが呼ぶハワイの呼び名）におけるポノと言われる事、すべてを統合したものです。それを絶えさせてはいけません。この土地に住む子供たちは大切に愛され、ポノを知り、マナを養っていく方向に導かれていかなければいけません。両親がどこで生まれたかは関係ありません。この土地に住んでいるなら、私たちの仲間です。ハワイアンです。ハワイの血統ではないかもしれませんが、この土地で生まれたのなら、この土地の子供です。子供たちは、アロハと誇りを持って扱われなくてははいけません。昔のように大切にされ、家族の価値観、愛、思いやり、貢献、誇り、がタペストリーの本一本でなくてははいけません。母なる大地、‘アイナも大切にしないではいけません。彼女も家族なのです。母なる大地を守り、傷つけない為にできる事はたくさんあります。どうかして、この新しい時代にすべてがポノである方

向に保っていかなければなりません。神々、'アウマクア、'オハナ、ケイキ（子供たち）、クプナ（長老たち）、マクア（親達）皆がお互いを思いやり、土地を大切に思える方向に歩いていけますように。もしも、それができなければ、明日はありません。アロハと呼んでも、愛とよんでもいいです。今日、社会はネガティブなものになってしまいました。自分たちに起きた悪い事の方ばかり数えています。分かち合い、思いやり、他の人の分まで責任を持つという事に時間を費やしていません。前に進みたいのなら、これらを実行して行かなくてはいけません。アロハは私たちの光です。その光を高く掲げて、道を照らし、後ろについて来る人を導いて行かなくてはいけません。石を持つ余地はありません。光を消したくないからです。



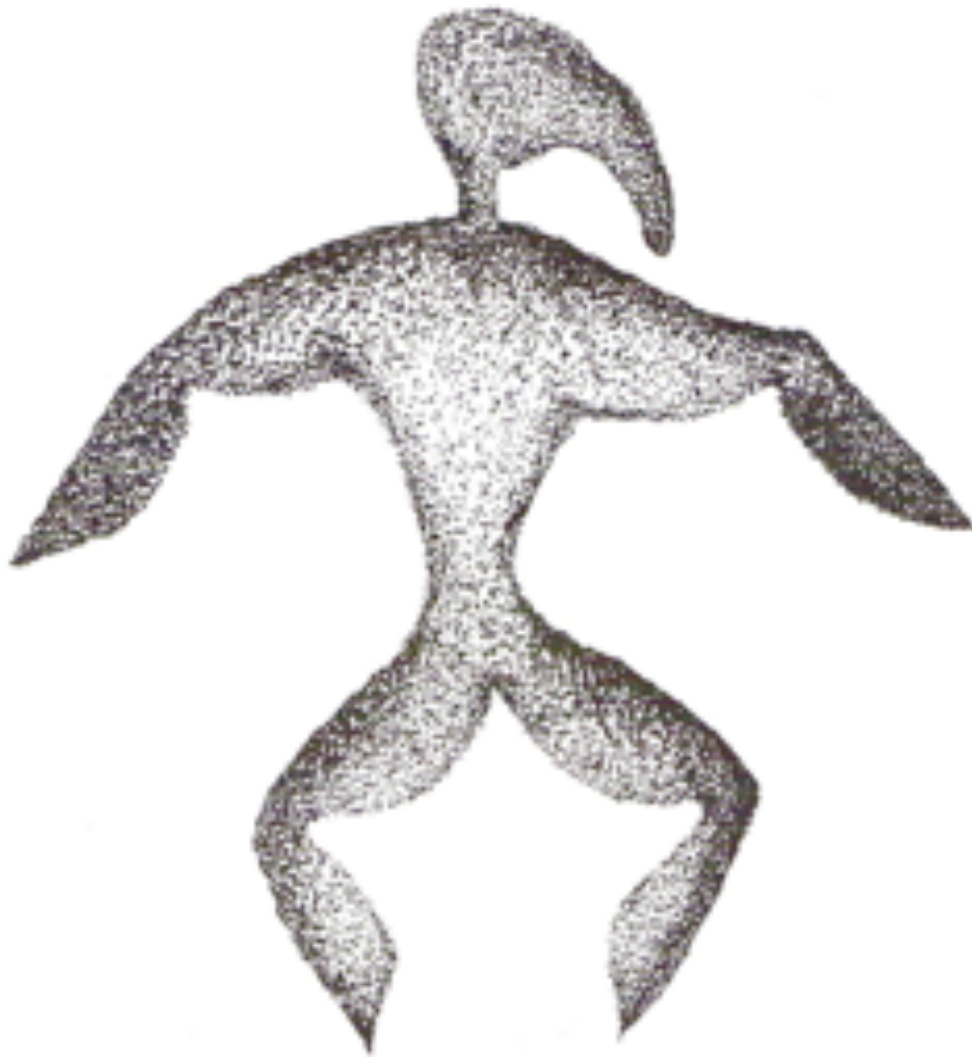
私は、私の民、この土地のカナカ マオリ
に忠誠を誓います
私は、'アイナが私の民を何代にも渡り
ずっと大事にしてくれたように

‘アイナを大事にしていきます
私たちに命をくれる川、海、海岸を大切にしていきます
いつまでもクプナ、生きている者、他界している者、共に
忘れずに大切にしていきます
母国語を‘オレロ、ずっと話していきます
サメのように勇気をもって
伝統を守っていきます
オレナのようになり、人々をまとめていきます
鷹のように、水平線の向こうを見て
探究心を忘れません
そして何よりもケ アクアすべてを創った
あなたを賞賛し感謝を贈ります

‘IMUA, I NA POK’I, ‘IMUA, I NA POK’I
E OLA, E OLA MAU, E OLA E OLA MAU
INO I KA WAI, AWA AWA



付録



付録 1

ホノルル、ビショップ博物館の会議室において、1982年6月4日に開催されたレクチャーの中でチャールズ W. ケンが語った内容：

これはオアフ島、カイルア在住のウイルバー オルソンによりテープに録音された記録を元にした内容です。レクチャーの内容は、マックス フリーダム ロングや

フナについてではありませんでしたが、最後の質疑応答の時に、部屋の後方に座っていた若い男性が質問しました。「マックス フリーダム ロングは、ハワイの秘密やカフナについて、ハワイの人たちが既に歴史やその知識を忘れた時代に、どのようにして学んだのでしょうか？」

以下は、チャールズ ケンの返答です。（――となっている箇所はテープから聞き取れなかった部分です。）

「まず最初にはっきりさせたい事は、ハワイアンはずっと自分たちの歴史や系譜を忘れる事はありませんでした。各家族で守られていて、代々受け継がれてきました。各‘オハナには、歴史のチャントを引き継ぐ者が決められていました。時には、同人物が家族の系譜を語るチャントを引き継ぐ場合もありますが、他の人が選ばれる事もあります。これは、ずっと重要だと考えられていました。ハワイアンにとっては家族というユニットが最も大切だと考えられていました。今日は変わってしまいましたが、昔はそうでした。マックスについてですが、私は彼の事は人間的には好きでした。とてもチャーミングな人でした。彼とは楽しい時間を過ごしましたし、彼に聞かれなければ、私自身、知らずにいた事がたくさんありました。私の錆びれていた好奇心を掻き立ててくれました。私も追求したいという気持ちにさせてくれました。率直なところ、今になってこんな大事になるとは彼も思っても見なかったでしょう。彼は、誰も知らないと思われる事について数冊の本を出し、少しお金を稼いだわけです。当時カリフォルニアは非常に遠い所でした。彼は予言者ではありませんでした。まさかテレビ、ラジオができて、飛行機で日々何便も往復しているような時代が来るとは、彼も思っていなかったでしょう。60年代に、私は一度だけ彼に忠告しました。その事を時々思い出します。彼も最後には後悔した事でしょう（彼は1971年に自殺しました）。放つものは、必ず自分に戻ってきます。ただ明日の飯の為だけに稼ぐだけではいけません。他の人への責任というものがあります。

マックスについて、何も知らない方もいらっしゃると思うので、少しお話ししましょう。1917年に彼は教師としてハワイに派遣されます。1年間ハワイ島のカウで働き、次の1年をコナで、もう1年をコハラで教師として勤めました。彼は好奇心旺盛で粘り強い性格でした。彼がハワイアンに質問すると皆知らないふりをしました。彼はがっかりしました。一体どういう事をしていたのか、ハワイアンからカフナについて教えてほしかったのです。マックスは、本の中でビショップ博物館のウィリアム タフツ ブリンガムに会いに行った時、ブリンガム博士はこう言ったと書いています。「君は今までどこに行っていたのだ？私は君を49年間待っていたよ」。そして、目の前で宝箱を開けるかのようにカフナについて語ってくれたと書

いてあります。しかし、現実的にはプリンガム博士は、その時もうビショップ博物館には在籍していなかったのです。マックスが彼に会ったという言う年、1912年には、彼はもう引退してハワイから去っていたのです。1912年にビショップ博物館に在籍していた人物は三人います。ジョン ストーク（演劇のディレクター）、キロラニ ミッチャルとブライアン博士です。その三名もマックス ロングという人には会った事がないと供述しています。要するに、とても理解しがたい事だとしか申し上げられません。1949年にハリウッドから戻ってきた時、私が博物館で働く――マックスについて。マックスは、私が多くの事実を追跡した事に驚いていました。私は彼にプリンガム博士は君に会っていないのだから、これらの情報を博士から聞いたというのは嘘になる事を伝えました。卑劣な言い方はしませんでした。彼の研究に携わる事はやめると伝えました。

マックスが死ぬ少し前、彼はオーダ ウインゴにも同じ事を言ったそうです。プリンガム博士は、ぼくにこう言ったんだ、「君は今までどこに行っていたのだ？ 私は君を40年間待っていたよ」。そして、オーダ ウインゴにフナの団長の座を引き継いでほしいと言ったそうです。ですから、私が言いたい事は、フナは興味深い研究ですが、人によっては信じる人もいるでしょうし、自分の為になるものなら、どんな信仰だろうが、迷信だろうが宗教だろうが、自分に効くと――決める――効くのです。自分が信じる事ですから。誰が言ったのか忘れましたが、「あなたの信じる心があなたを完全に作る」という格言があります。ですので、自分にとって効果があるのなら、それを信じ信仰する事は、悪い事ではありません。あなたを助けるものなら、けして悪い事ではありませんが、どうか、どうか、知って頂きたいのは、これは全く一度でもハワイのものではなかったという事です。「フナ」は、色々な教えを取り混ぜたものです。とても人々に役に立つ内容でしょう。ハワイには既に良い教えがたくさんありますので、フナを取り入れる必要はないのです。



付録 2

マックス フリーダム ロングからティオドル ケルシーへの手紙

1941年6月6日

親愛なるケスリーさんへ

。。。これは私にとって大変残念な事です。しかし、私は最近カフナイズム、心理学、怪奇現象などについての小さな無料のクラスをはじめています。その内数クラスを終えた後、私のやっている事に真剣に興味がある人たちには、私の書いている小冊子を渡そうと思っています。既に前宣伝として、とても面白い資料がある事を皆に伝えています。それから来月からシカゴで出版されている小さな雑誌オカルト ダイジェストに、（私の想像する）カフナについて5頁程の記事を出します。発行部数は18,000だそうで、オカルト ファンが読む雑誌です。私に報酬はありませんが、この記事を元に興味のある人たちから私宛に手紙を書いてくれる事を期待しています。もしも人気があるようなら、本の出版の可能性が出てきます。。。。

私の最初の試験的なクラスが発展して、私の熱意が現実となった暁には、古いヒーリングの祈りを訳して後のクラスで紹介する為に練習しておく必要があるかもしれません。色々な可能性が想像できますが、お金がない事には何も始まりません。最近、税金の滞納や負債に苦しむ日々です。。。小説がシリーズ化して、

どうにか運がもてば、ずっとやりたかったカフナについての小冊子を発行できるかもしれません。ハワイ、バーバー族、エジプト等を題材にしたものは、今では科学と宗教の両方の興味対象となっているはずです。

。。。私は今、レクチャーの練習できる機会ができたので、これは良い事です。いつか出版が決まったら、都会でもっと大きなグループを指導し、講義の招待を受け、この仕事への寄付が集まるかもしれません。すべては神のみぞ知るという事で、時が経てばわかる事でしょう。

。。。まだ私は、高度な魔術を使うための超意識の存在に繋がる方法、秘密は、それを象徴する言葉あるいはその言葉そのものの中に隠されていると思えてしょうがありません。

。。。イギリスに住むスチュアートは、ポリネシアとバーバー族のカフナについてエジプトが発祥の地であったかどうかを調査してくれています。バーバー族のカフナは、伝説によると魔術で巨大ピラミッドを建てたとされていて、侵略がはじまる前に移住していったそうです。彼はとても面白い内容を発見しましたが、まだ科学的に証明できるところまでは行っていません。

。。。あなたの方はすべてうまく行っている事と信じています。

幸運を祈り、アロハを送ります。

(署名) マックス フリーダム ロング

付録 3



マックス フリーダム ロングからティオドール ケルシーへの手紙

1940年8月28日

親愛なるケスリーさんへ

。。。彼（ベラスコ氏）がカフナたちやその種の人たちを探しあて、私が幽体あるいはキノアカについて導き出した理論でMMSに提出した内容を正しい見解かどうか見てもらえる事を願っている。良き友であるベックレイ博士が言う様に本当に検討違いの推理なのか、それとも近い線をいっているのか知る事ができたらうれしい。

私が自分のアイディアを提唱したい理由の一つとして、私のイギリス人の友人W.R.スチュワートが北アフリカのバーバー族のカフナたちから直接トレーニングを受け、彼から聞く内容と類似しているからだ。このバーバー族は、ハワイ語とは異なる言語を話す、ポリネシアの言葉でもある「カフナ」は同じ意味で使われており、カフナの信じる概念にも同じ言葉が使われている。

。。。なぜ君が言うその古い聖地の写真がある図書館にスピリットたちが導いてくれなかったのか、本当に残念だ。私が行った時の図書館員を恨むよ。彼女はさんざん探したあげく、クックとヴァンクーバーの本ばかりを持ってきた。図書館にまだそのような珍しい資料が残っているのは、とても面白い。もっと図書館に長く粘って探すべきだった。でも私が博物館に行った時は大学生がいて、名前は今思い出せないが、インデックス・カードを持っていて、私が探していた航海についての珍しい書物をすぐに見つけてくれた。

私がスピリットたちからの受けるメッセージは、とても遠回りな間違った情報だったり、混乱させるような内容だ。クリアな情報ではなく役に立たない。更に感じるのは、彼らは新しいアイディアを受け入れたがらないという事。カフナの筋であるスピリットを一人教育しようと思って、何回もクラスで試したのだが、ある結果に到達した。何回も自分で試し、また人が試したものの録音を聞いて結論を出す、十分なマナが供給されていない場合、スピリットは新しい思考の型を生み出す事やクリエイティブにパワーを使う事ができないようだ。彼らは、自分の生きていた時からのアイディアに固執していて、新しい情報は、あひるが水かきをするかのように後ろに追い払ってしまうのだ。

。。。君が色々な仕事があるようでよかった。私は最近2ヶ月程の仕事があったが、それっきりだ。今三つ目の殺人ミステリーを出版したいと試みているが、相変わらず借金生活で、仕事と仕事の合間に三つ低俗な話を書いたがまだどれも返事をもっていない状態だ。低俗な雑誌”Unknown(未知の境地)”が新しく刊行されるが、数々の魔術を並べ上げ、真実で可能性を秘めているかのように綴った雑誌だ。けっこう楽しめるものだ。その雑誌社に二つ作品を送ってみた。両方ともポルターガイストや取り憑かれた霊たちの襲撃のような話だ。こんな方法で食費を稼がなく

てはいけないのは、残念だけど、はっきり言って財布の中はかなり底をついている状態だ。あまり努力していない。もっと頑張ったならもっと結果を出せるのかもしれない。つい悪い習慣でもの思いにふけてしまうのだ。なかなかそこから抜け出せない。もっと論理的に行動して、使うべき力をしかるべき方法で活用する事を実践すると決めたのだが、ついそれを忘れてしまう。第六感とか靈感が、常に私たちに感銘するような体験を与えてくれ、見たり食べたりできないものが存在する事を教えてくれるべきだ。何？

もう一度お礼を言います。本当に色々調べてくれてありがとう。大変感謝しています。
(署名) マックス F. ロング

付録 4



ティオドール ケルシーからマックス フリーダム ロングへの手紙
1936年3月25日

親愛なるロングさん、あなたが書いたけっこうな本と貴重な資料の入った箱を送って頂いてありがとうございます。資料は、先生であり特別な友人、フレッド ベックレイ教授と目を通しています。教授は、ハワイ大学でハワイ語を教えていた人でイギリスのオックスフォード大学にてハワイ文学の博士号を取得されています。彼は自分の民であるハワイアンの運命、特に不当な行為を受けた事について著しく関心があり、気難しく、知らない人にとっては、信頼、同情や協力を得るのは大変です。鋭敏な詩的センスを持ち、そのせいで彼の際立つ想像力と学説は、あまり受け入れられず問題になった程です。解読の大変困難なハワイ語の古代の祈りや歌は、彼の手にかかるとその意味の美しさと繊細なセンスが浮き彫りにされます。そういう意味では、彼はマインドのマスターだと言えます。普通の人の手によって訳されたものは、すべて一つのメレ（歌）以外は、大きく間違っただけで訳されています。その例外のメレは、宣教師スタイルのもので、あなたがハワイのものとして送ってきたものです。これは、とてもシンプルな幼稚なハワイ語で書かれています。それに比べて、本物の古代の作品は深い意味と構成から出来上がっています。ベックレイ教授と目を通しましたが、平易な文飾のない言語では誤訳があります。他の人たちにも確認をとるつもりです。宣教師が到来してから、その影響でどれだけ新しい言葉が作り出されたかは、はっきりはわかりませんが、この歌を読むと、ハワイアンの方が宣教師たちに宗教というものを教えていたように思えます。この歌の内容はそれを示唆しています。ですので、この歌は、古代のハワイのものであるとはけして

云えません。そして残念ながら、あなたが本の中でヒーローに仕立て上げているブリングラム博士について、ベックレイ教授は非常に良くない見解を示されています。ブリングラム博士は、あなたが思うようなハワイ語を専門とする言語学者ではありません。彼の22年間の仕事は、ほとんど不真実な内容であり、成果がほとんどなかったと言えるでしょう。グレゴリー博士のレポートをあなたも読むべきです。彼の目を通してあなたの“ヒーロー”についての真実を見る事ができるでしょう。顕著な彼からきっと学ぶ事があると思います。

ブリングラム博士は、ハワイの文化の保存に関しては全く何にもしていなかったと言っても過言ではありません。価値のあるものと評価されたものは、他の人たちによって書かれたものでした。これはグレゴリー博士のレポートに記述されている通り、彼の後継者が証言しています。ベックレイ教授は、更にブリングラム博士の性格には深刻な欠陥があったと言っています。私個人的には、性格の問題とその人の才能や成果とは別に考えます。しかし、本のヒーローに仕立てるのであれば、その前にその人を良く知るべきではないでしょうか？それではあなたの述べた仮説に関してのベックレイ教授のコメントやメモをここに記します。

ウニヒピリとは、以前に人間だった魂を偶像化した霊体です。死んだその人の骨、あるいは遺品からその霊に呼びかけ、霊体として、この世に生き返らせたものです。呼び寄せたキーパーが悪用し、通常は復習の為に人を死へも陥れる事ができたのです。とても悲しい事です。ウニは、話すという意味で、ピリは、他人に自身をくっつけるという意味です。

‘アウマクアに関しては、大本の‘アウマクアは、ガーディアン・エンジェルだと教授は言っています。ガーディアン・エンジェルとは、人間になった事がない存在で、大本は、‘アウマクア オケアオと呼ばれたと言っています。（これについては私は個人的には疑問に思います。）その後の‘アウマクアが夜の存在で‘アウマクア オカポ-であり、偉大なる未知の存在です。両方とも、ビショップ博物館発行の資料でケペリノの書いたものを引用しています。

カトリック教は純粋なポロネシアの宗教を汚染しました。その為‘アウマクアさえも教会の許可得て助っ人になった聖人たちのようにガーディアン・エンジェルに落ちこぼれてしまったのです。もちろん、この仮説は証明しがたいものであり、また反証をあげるのも難しいでしょう。



付録 5

「People of Old」（初版1964年：ビショップ博物館出版）

著者：サミュエル カマカウ、28頁より「'アウマクア – 先祖である神々」

‘アウマクア、家族の先祖である神々は、記憶のない程太古の先祖の源となる神々の事です。 *Akua kumu kahiko mai na kupuna mai*、古代の人々は、自然現象を人格化し、それを神とみなし、自分たち家族の先祖、源であり、また、実際に自分たちがその神の子孫であると確信していました。もしも神が人間と交わり、人間が生まれたなら、その神がこの家族の‘アウマクアあるいは、クムパ‘アであり、確固たる源となります。

先祖神は、‘アウマクアあるいはクムパ‘アと呼ばれており、以下は全く違うものです：アクア ‘ウニヒピリ（人格化した幽霊）、アクア カク‘アイ（死体から‘アウマクアに変身させたその容姿を持った霊）、アクア ホ‘オラ‘ア（霊が聖化されて神となった神）、アクア マケマケ（欲望や必要な理由から作り上げられた神）、アクア ホ‘オウル（誰かの靈感によって発生した神）、アクア マリヒニ（新米の神）、アクア ハ‘オレ（外国から紹介された神）。アクア ‘アウマクアやアクア クムパ‘アは、大変深く敬意を払われていた神です。神が必要な時に現れてくれる神でした（*he akua no ka la o ka makemake akua*）。

先祖が言うアクア ‘アウマクアとは、カネ、カナロア、クーとロノの事です。 *Na pu‘ali o ka lani me ka honua*, “天と地の主人たち”は、男性の先祖となる‘アウマクアたちを通じてつながっています（主人たちとは、他界した先祖で、自分が属する次元における‘アウマクアの仲間となった人たちの事）。無数の男性‘アウマクアは、カネの世界（*i komoiloko o Kane*）に属していきました。その中には、カネヘキリ、カネヴァ-ワヒラニ、ナコロイラニ、カウイラヌイマケ-ハイカラニ、カモ-ホ‘アリイ、ロオマクア、ナホアリ‘イ、ナホ‘アイク、カネ-マナイアヘエア、カネ-ホロパリ、カネポハカ‘ア、カニウロポ、カネ-イコカイア、カネコハ、カネ-イコケア、カネイカウイラ、カネケ‘エ、カネレシ、カネハカ、カネイカブレ、そしてカネイカマカウカウがいました。クーとロノにも同じように属する‘アウマクアたちがいました。カナロアだけが眷属を持ちませんでした。

源となる女神たちは、クム‘アウマクア ヴァヒネと言ひ、その名前は、ハウメア、カハカウアココ、ヴァリヌ’ウ、ヴァリマノアノアとホ‘オホクです。この女神たちは「天と地の主人たち」と通じて崇拜され、女性の‘アウマクアたち、ペレ、ヒ‘イアカ、カポ、ナマカ-オカハ’イ、カヒリオプアとつながっており、「天なる女性ーラニ ヴァヒネ」もこの女性‘アウマクアと親戚関係にあり、また女神ハウメアとも繋がっています。ウリという女性は女神ハウメアの一部になり、(i komo iloko’o haumea)、ヌ’ア、ヌ’アケア、カパ’ウアヌ’アケアとニホ’アイカウルも同様にハウメアの一部となりました。

古代の人は、儀式の祈り(クイリ プレ)を唱える方向(プレ カホアホア)は、朝日の昇る方角から沈む方角へ、また北から南へ、そして天の頂点から大地の中心まで訴えます。このすべての領域には、スピリットたちが充満しているので、そのすべてに聞こえるように唱えます。カポ’エ カヒコ、古代の民はこのように祈りを送りました。

古代、‘アウマクアとクムパ’ア、先祖神は、天界の許しを象徴するヒーラー(プウ カラハラ)であり、問題を中和(ヴェヘ)する立場にありました。死や苦痛を送る黒魔術師とは全く関係ありません。しかし、その難から逃れる事ができたらなら、それは”‘アウマクアに生かされた”(o ke olaia a ka ‘aumakua)と言います。船が沈没した際に、無事岸に辿り着いた時も”‘アウマクアに生かされた”事になります。戦場で負け組にいて、多くが殺された中無地に生き残った時も”‘アウマクアに生かされた”のです。病気になり目が曇り死相が表れ、誰もが助からないと思ひ、誰も助ける手だてがなかったにも関わらず、無事生還した時、その人は”‘アウマクアに生かされた”のです。多くの命が‘アウマクアによって生かされているのです。中には、墓から生き返った者もいます。これも”‘アウマクアに生かされた”と言えます。古代は、多くの命が‘アウマクアによって救われていました。正しい生き方をした人は、‘アウマクアと共に生きた人生として祝福されるに値する人生です。また、’アナ’アナやホ’オピ’オピ’オ、カロ ホ’オラ’ア、ホ’オウナウナ、カラ-イパホアなどの黒魔術師や他の人から死を呪われたにも関わらず、それを逃れて生きる事に成功した事も”‘アウマクアに生かされた”事になります。

この新しい時代には、‘アウマクアは、人々にとって苦々しい敵の存在と思われるようになってしまいました。名前に誓った事を破った時、神聖とされるものを愚かにも食したり、汚れたものを食べたり、法律を犯したり、性犯罪を犯したり、

神の法則、土地の法則、両親、夫、妻、子供、親戚の間の規律を尊重しない等、あらゆる罪を'アウマクアの子孫たちは犯し、自分の非であるにも関わらず、'アウマクアは、それをきつく叱る存在だと思われています。今日'アウマクアは、あまりにも多くのものと繋がっている為、人間が犯した過ちを償う為にお供えものを捧げる事がとても重荷になっています。今日、多くの問題は、ハワイアンの男性、女性、子供たち自身の問題であり、古代のように“アウマクアに生かされる”までに至っていません。

'アウマクアとクムパ'ア、先祖神は、守護天使(アネラ キア'イ キノ)でした。人が死んだ時、'アウマクアとクムパ'ア、は死後の世界でその人を導きます。その死んだ者が自分の子孫(ブラブラ)であり、前頁に記述した'アウマクアと親戚であるなら、あるいは天の'アウマクア(カ ポ'エ 'アウマクア オ カ ラニ)か 空の'アウマクア(カ ポ'エ 'アウマクア オ カ レヴァ)に属する'アウマクアの親戚であるなら、そのしかる場所(天)に自身('アウマクア)が連れて行きます(これをキ'イ マイと言う)。一度死んでまた戻ってくる事をアペラ ノ エ ホ'イ ホウといいますが、この現世に来て人と話したり、山、海、大地、火山などと対話する事もできます。多くの人々が臨死体験をし、このような体験をしたと話しています。古代も今も変わらず、このような事は起きています。このような臨死体験をした人たちは、'アウマクアの領域について否定しません(クケアナ'オレ)。これらの魂は、マウイ島のカマ'オマ'オの平野あるいはオアフ島のプ'ウオカポレイの平野をさまようと言われていています。蜘蛛と蛾を食べます。

'アウマクアに祈りを捧げる時には、'アウマクアの名前と先祖の中の聖人(ポ'エ メノレレ)、チーフのような存在だった人たち、カフナや神官や著名人などの名前も加えて唱えます。但し、祈りを捧げる人が、カフナ ラパ'アウ(薬草治療師)の場合は、'アウマクアの名前と神官の血縁である自分の先生の名前も加えます。カフナ'アナ'アナとカフナ クニたちも同様に先生の名前を加えます。これは、その祈りが“行方不明”にならないように(ナロヴァレ)、その先生と'アウマクアが自分の仕事に力を貸してくれるように声をかけます。このようにして、古代の人々は、病気の時、魚の収穫を増やしたい時、特別な過ち(ホ'オカラカラ)を犯してしまった時、任務を果たせなかった時、怠慢してしまった時の許しを請う時、あるいは家族に苦難が生じた時などに'アウマクアにホ'アウマクアし、力を貸してくれるように祈りを捧げてきました。

家族によっては、'アウマクアを持たない場合があります。先祖から'アウマクアを受け継いでいなかったという事です。その場合は、他界した祖父あるいは祖母、父親、母親のいずれかを通じて'アウマクアを探し宛てる事（ホ'アウマクア アク）ができます。 他界した家族がすべての'アウマクアに呼びかけ（カヘア アク）、自分たちの子孫にとって正しい'アウマクアを知らせてくれます。この作業（マカウカウ イ カ ホ'アウマクア）に成功したならば、彼らは直属の先祖を通じて自分たちの'アウマクアとつながる事になります。このようにして、後に'アウマクアを先祖という関係（'アオ'アオ）を通じて探し宛てる事は問題ないとされていました。

'アウマクアにコンタクトをとる時には、二種類の祈りがあります。一つは、男性の'アウマクアと男性の先祖の直属の一家系（ララ ホ'アカヒ）に向ける祈りの言葉で、もう一つは、女性の'アウマクアと女性の先祖の直属の一家系（ララニ ホ'アカヒ）に向ける祈りの言葉です。



付録 6

カモ'オレロ ハワイ 著者：デービット マロ 翻訳：マルコム チュン 186頁

ポノとは何か。

16. ポノ マオリ(真に正しい)と思われる行動、行為がありますが、不幸はまたすぐに訪れる事があります。何かに目が止まり、それをハートが欲した時ホ'オ マナ ヴァヌイ (辛抱) して、それをすぐにとろうとせず、すぐにその欲望を忘れ、触れる事さえしなかった場合、これはポノです。
17. 物を勝手に持って行く、嘘をつく、群がって勝手に人の家に入る、物欲しげに何かを見る、物乞い、これらの行為は良からぬ態度であり、それをしない事はポノです。
18. 他にもポノと思われる行動、行為があります：怠慢でなかった為に十分な供給がある状態、派手に振る舞わない、無責任でない、他人の食事を取り上げない。これらはポノです。
19. 更に、夫と妻と一緒に暮らす事、子供や友人を持つ事、ハク 'アイナ(土地を持ち)大切に事、マヒ'アイ(農夫)、ラヴァイ'ア (漁師)、ククル ハレ (建築師)、カライ ヴァ'ア (カヌーの彫り師)になる事、プア'ア (豚) 、イリオ (犬) 、モア (にわとり) を育てる事。これらはすべてポノでした。
20. 以下の事柄もポノとみなされていました：楽しみや快樂に溺れない事。ノ'ア、パヘ'エ、マイカ、クキニ (足相撲) 、ヘイヘイ ヴァ'ア、ヘイヘイ ナル、ヘイヘイ ホルア、プ カウアラ等のゲームや娯楽 (レ'アレ'ア) のを途中で放り出さない事。
21. 上記の行為は、ポノな状態を更に向上させ、人生の質を高める (カオホ'アナ マ ケイア オラ'アナ) 為にできる事です。これはとてもポノな事でした。
22. マヒ'アイ(農夫)、ラヴァイ'ア (漁師)は、'オフア (彼らに頼る者) が大勢います。そして、彼らの努力に貢献する道具があります。ですから、彼らと彼らを支える道具は、メア ハナ **ポノ** ロアと呼ばれました。
23. 神を象徴する像を崇拝する (ホ'オマナ 'アナ) 事は、良い事 (ハナ ポノ) だと昔は考えられていました。古代の人々は真の神を多いに信じていました。ですから一般人は (マカ'アイナナ) は、アリ'イたちが宗教儀式を行ってくれる事を望んでいました。儀式を行なう事でチーフの政権が安泰に継続 (エ オラ アナ) されると信じていました。
24. カライ ヴァ'ア(カヌーの彫り師)は、尊敬 (ホ'オポノ'イア) されていました。

カヌーを作る事によって、外国に航海したり、戦争に参戦する事が可能にな

- りましたので、有益なものとしてカヌーは、多いにポノであると言えます。
25. カフナ プレ（祈る事を専門にするカフナ）もまた尊敬されていた存在です。神となる像は、マナ（力）に満ちていると信じられていたので、その像に請願するのは、このカフナでした。そのカフナが祈る事により、神に願いが聞き入れられたのです。
26. キオラニ（天を観察する者）もまた尊敬されていた存在です。彼はいつ戦場から逃れるべきかを読む占い師でした。クヒクヒ プウオネ(占い師/予言者)も尊敬されており、ポノ（適切）なヘイアウ（聖地）はどこかを読み、戦場からその地に逃げれば安全だという事を予知しました。
27. カカ'オレロ（演説者）も尊敬される存在でした。アリ'イたちにポノ（適切）なガイダンスを与える役割でした。コア（戦士）たちも敵を討取り、その勇敢な姿勢を見せる尊敬に値する存在とされていました。
28. 魚を釣る際に'ウペナ（網）とヒロ アホ(釣り竿)を操る者、カライ クア(木こり)、ホレ'イエ（'イエという植物の皮をむく専門の仕事をする人）、カパを打ち、マロやパウを作る人々もまた尊敬されていました。

参考文献

カマカウ、サミュエル（Kamakau, Samuel）：*Ka Po'e Kahiko – The People of Old*. Transl. and ed. Newspaper Ke Au 'Okō'a by Mary Kawena Pukui. Arr. And ed. By Dorothy Barrère, Bernice P. Bishop Museum Special Publication 51, Bishop Museum Press, Honolulu, 1987 (1964)

ケルシー、ティオドール（Kelsey, Theodore）：ケルシーの手紙、ハワイ州文書録 M86, Folder 10 Max Freedom Long

マロ、ダヴィダ(Malo Davida)：*Ka Moolelo Hawaii – Hawaiian Traditions*, Trans and ed. By Malcolm Naea Chun, First People's Production, Honolulu, 1996

リー、パリ ジェー&ココ ウィルス（Lee, Pali Jae & Koko Willis）：*Tales From the Night Rainbow – An oral history as told by Kaili'ohe Kame'ekua of Kamalo, Moloka'i 1816-1931*. Night Rainbow Publishing, Honolulu, 1983

著者について：

ジョン ココ ウィルスは、通称ココと呼ばれていて、幼少期を祖母であるカウイ パイア（モロカ‘イ島、カマロのカイリ’オヘ カメ‘エクアの娘）の元で過ごしました。その頃既に大変数少なくなっていた昔のやり方で育てられました。ハワイの古代の教えを学ぶと同時に、カトリック教会、プロテスタント教会、ペンテコステ教会のいずれかあるいはすべてに行く事を課せられていました。魂の為に良き事で学びであると思われていました。この事で彼は多いに忍耐を学びました。マッキンリー高校に通っていました。

彼は労働者、クレーンのオペレーター、バスの運転手、ツアーバスの運転手として仕事をし、最終的にホノルル市の運営する、Hawaiian Section of Parks and Recreation (公園とレクリエーション課)で生き甲斐を見つけます。彼はそこでラウハラ織りやオパラ（植物の葉）から天使や他のデコレーションを作る方法を教え、子供たちに潮の満ち引きでできる自然のプールや海について教えたり、クプナたちと一緒にヒーリングや薬草についての話しをしました。1994年8月に死去するまで、ビショップ博物館のアザートン ハラウにおいて週末の夜10年間に渡り働いていました。

パリ ジェーリーは、ビショップ博物館の人類学の部署にて、調査員のアシスタントとして勤めていた時にココと出会います。彼の家族の系譜をまとめるのを手伝い、その後、カメ‘エクアの家族、子供たちの為にカイリ’オヘのストーリーを集める事に努めました。家族の意見一致でこのストーリーをハワイの子供全員に公表する事を決め、「*The Tales of the Night Rainbow – 夜の虹の物語*」が誕生しました。

パリ ジェー リーは、盲人の為の非営利団体、Blind 55 plus とHa Ha Me Na Limaで活動していました。Library Advisory Bd of the Library for the Blind(図書館における盲人に関する顧問委員会)のメンバー。自分の余暇の時間は、大好きな本をカセットテープで聞き楽しんでいました。

この「ホ'オポノ」の本が彼女の最後の作品となるでしょう。しかし、好奇心旺盛なので忙しくしていく事でしょう。彼女が最後まで二匹の猫、ミートゥーとボーイと共に暮らしていました。(2009年死去)

